第四回韓国言語文化研修で得たもの

信州大学人文学部４年　中島葉子（代表）　田口愛葉（副代表）
酒巻　愛　佐藤智佳子　向出真理子
３年　青山恭子　荒井典子　臼井啓祐　奥田江美子
高田千穂　玉井芳恵　村松咲穂里
２年　新井恵美　粟野　藍　折笠かすみ　紀　偉
深見倫恵　藤田亜希子　李　燕

交流をつくるということ

信州大学人文学部４年
本研修学生代表
中島葉子（日本語教育学専攻）

二回目の参加となる今回の韓国言語文化研修で、私は代表という立場になった。これまでは、上の学年の先輩たちにただ引き連れられていたというのが実際の状況だったのかもしれない、と今になって思う。それが今回は、カトリック大学・信州大学双方の先生方のご協力もあって、四年生をはじめとする学生の意見が大いに反映される研修旅行となった。

カトリック大学の代表であるユ・ジョンさんとは、何回かメールの交換をし、出発直前まで研修旅行中のスケジュール等について計画を練った。この企画は参加している学生に喜ばれるだろうか、どの程度参加学生にとって意義あるものになるだろうか。そんな不安ばかりがあった、というのが正直なところである。

今回初めてのプランとして、信州大学からの提案で討論会と韓国民俗村への観光が、そしてカトリック大学側からの提案で料理会が企画された。これまでの研修旅行の内容を振り返って、変えたらよいところはどこか、加えたらよい活動はどんなものか、ということを考えた末の提案であった。

結果的に、一番印象深かったのは民俗村観光であった。代表としての役割から皆の前に立って話をする機会が多かったのだが、このときは、全員の表情が旅行中で一番晴れ晴れとしていたように思う。もちろん、この民俗村観光より以前の行事でも、参加者はさまざまな表情をしていて、それを見れば、色々な刺激を内面に受けているということは伝わってきた。この日、初めて韓国の伝統的な建造物や暮らしぶりを目にすることで、案内する方もされる方も本当に楽しんでいるように見えた。この時は韓国人の学生とペアになり、会話をしたり体を動かしたりしながらの一日であった。この一週間の中でおそらく一番体力を使ったであろ

う。この日に、皆が充実した表情だったのを見て、私の不安は消えた。

また、討論会や料理教室も、韓国人学生と日本人学生が直接意見交換をするよい機会になったと思う。討論会は、参加した韓国人学生にとっては、“意見”を皆の前で言うということが少し難しいのでないかと思っていた。“話”をするのではなく、異なる考え方を持つ相手を理解しながら、意見の交換を行うということは、母語であっても簡単なことではないはずだからである。実際の討論会でも、なかなか意見は出なかった。しかし、司会をやってくれた学生たちのおかげもあって、徐々に自らが思っていることをぽつりぽつりと発表してくれるようになった。たとえ少し上手く言えなかったとしても、何とか伝えようと努力する韓国人学生の姿に、自らを省みさせられた。欲を言えば、私たちが事前の準備を入念にし、日本人学生に、積極的な参加の姿勢を指導しておけばよかった、と反省している。提案したのが信大側だったにもかかわらず、日本人学生があまり発言しなかったために、うまく発言する自信もない韓国人学生は余計に発言しづらかったという雰囲気があったかもしれない。

今回、いくつかの新企画を実行することができ、幾つか考えさせられたことがあった。まず、何よりも、たった一回の交流の機会を成功させることが如何に大変かということである。このことを今回ほど感じたことはなかった。同時に、その交流には本当にさまざまな人のさまざまな思いが込められているということである。今回の研修旅行は、これまで積み重ねられてきた、交流を支える人々の思いの上に成り立つことができたのである。

先に、民俗村観光などでは学生同士が本当に楽しむ姿を目にしたと述べたが、これまでの交流の軌跡を考えれば、ここからさらに交流が発展していく、そのことが学生の学習意欲に繋がる、あるいは視野が広がるなどの、個人の進歩に生かされていくべきなのだと思う。今回初めて参加した学生にとっては、自分の経験を振り返って考えてみても、この交流が自らの意識の変化の大きなきっかけとなるはずである。韓国人の友達ができたことも、今後の大きな財産となるだろう。

今回の交流に参加した学生が、今回の反省を生かし、また新たな想いを持って参加することで、これまでがそうであったように、さらに幅の広い交流につながっていくことを期待している。事実、今回は事務職員交流も実現し、来年は信州大学がホストとなる新しい形の交流が実現する運びとなった。

最後に、今回お世話になったカトリック大学校の先生方、学生の皆さん、信州大学から引率してくださった船津先生、福嶋さん、丹生山さん、桜井さん、そして沖先生には、私たちを支えていただき、心から感謝しております。本当にありがとうございました。

貴重な体験から学び得たこと

信州大学人文学部４年
本研修学生副代表
田口愛葉（日本語教育学専攻）

日本はいま、韓流ブームの真っ只中である。そのブームと重なるかのように渡韓した私たちだが、目的はカトリック大学校を訪れての韓国言語文化研修であった。研修は今回で４回目を数えることになったが、私自身にとっては３度目の訪韓であった。2 年前にはじめて訪れた時とは異なり、今回は信州大学側の副代表として企画・運営に関わる立場となり、その経験は私自身を精神面で成長させてくれた。

この研修旅行で強く心に残り、また勉強になったと感じる行事は、日本語スピーチ大会である。日本語学習者のスピーチを聞かせていただくだけでも貴重な体験であるが、私は審査員を務めさせていただくことになり、重ねて貴重な体験ができた。日本語スピーチ大会では、話される内容から、発表者の話す日本語から、そして審査員を務めたことから学んだことがあった。以下に詳しく述べる。

まず、スピーチを聞くことにより、その内容から韓国人日本語学習者の日本語または日本に対する意識や自国に対する意識、さらには日韓関係についてどう把握し何を思っているのかなどを理解することができた。テーマとして選ばれていたのは、教育問題、コミュニケーションの方法、日韓両国語の比較などであった。なかでも教育制度についての問題点を掲げる学生が多く、現在の韓国で教育が一つの大きな問題となっていることが理解できた。日韓関係について触れている学生も多かったが、単純に日本語に興味を持ち学習している学生や、日本文化に惹かれ日本語学習をし始める学生がほとんどである中で、日韓の歴史から日本を憎み、その敵対心が日本語を学ぶきっかけとなったという学生がおり、学習動機が人それぞれなのはもちろんであるが、必ずしも日本や日本語が好きだという理由だけではないことを知った。2004 年、韓国では日本文化が全面的に開放され、日本への関心が益々高くなる一方で、未だ歴史的事実や教科書問題などで日本や日本人を好ましく思っていない人がいるという事実を私たちは忘れてはいけない。

発表者が話す日本語はたいへん流暢であった。スピーチ大会の参加者は、日本語を主専攻としている学生、他専攻を主としており日本語は副専攻であるという学生と分野に富んでおり、学年も幅広かった。しかし主・副や学年に関係なく誰もが上手に日本語を話した。学生の並々ならぬ努力のみならず、指導教官の手厚い御指導の賜物であると感じたが、何よりも心に響いてきたのは、発表者の日本語学習に対する熱心さであった。また逆に、母語の干渉により、濁音を含む単語

を読むのに苦労している学生の姿を見て、効果的に身につけさせるためにはどのように指導したらよいのかなどという教授法について考えてみるきっかけとなった。

審査員になって学んだことは、審査・評価することの難しさである。人の業績やそれに対する努力について評価するという経験がこれまでに少なかったということもあるが、自分の中で審査基準を設け、客観的に評価するのに非常に苦労した。評価は、日本語教育においてもたいへん重要なものとして位置づけられているし、重要視をしていたつもりであったが、単なる聴衆ではなく、審査・評価する側の立場になってみて、実際には何の考えも持っておらず、審査をするということを軽視していた自分に気がついた。そのため、短時間で、しかも的確に評価しなければならないということが途轍もなく難しいように思えた。今回審査する立場に立たせていただけたというこの経験は、たいへん貴重であったし、日本語教育や日本語教師という職業について今一度考えることのできる良い機会となった。

以上のように、日本語スピーチ大会は、私自身にとっても非常によい勉強になった行事であった。日本語スピーチ大会は、2 年前に初めて研修旅行に参加させていただいた際にも実行された行事である。あの時はただ漠然とスピーチを聞き、その見事さに驚愕していただけだった。2 年が経ち、前回は気づくことのできなかった様々なことを体感し、学ぶことができたのは最大の成果であった。

信州大学側の副代表としては、至らない点など多々あったと思う。そのため、沖先生をはじめ、カトリック大学校の李先生、姜先生、斎藤先生、玉懸先生、学生代表団の方々に多くのサポートをいただいた。また、船津先生、福嶋さん、丹生山さん、桜井さんにもたいへんお世話になりました。この場をお借りして皆様に心より御礼を申し上げます。最後になったが、来年の日本での交流の成功、そしてこの交流がより深く、広くなってゆくことを期待したい。

韓国の教育問題

信州大学人文学部４年
酒巻　愛（日本語教育学専攻）

韓国に向かう飛行機の中、私はこれからの一週間に対する期待と不安で胸が一杯だった。初めて訪れる韓国。機会に恵まれながらもそれを生かすことができず、ずっと訪れたいと願っていた。そんな事を考えているうちに、飛行機はあっという間に海を越え、澄み切った空と温かい笑顔が私を迎えてくれていた。

今回研修に参加するにあたって、全体の大きな目標として「心を開き、礼をつくして交流する」というものがあげられた。また、自分自身の目標としては「日本の文化や考え方を広く多くの人に伝える」というものをあげた。外国という地で人と接するからには、できるだけ多くの人と交流を持ち、自ら心を開き多くの情報を発信するということを心掛け、研修に臨もうと考えた。そして私は研修中のさまざまな場において、自分の想像を上回るような大きな衝撃を受け、印象に残る体験をしたのであった。

その出来事の一つとして、日本語スピーチ大会があげられる。大会では全部で14名の学生がスピーチを発表した。広い講義室の中で目の前に審査員が並び、多くの学生の注目を浴びるという緊張した空気の中で、どの学生も大変素晴らしいスピーチを披露していた。外国語でスピーチをするという事だけでも難しいことだが、内容はさらに素晴らしく、感動した。また、その姿は堂々としていて、とても自分と同じ学生とは考えられないほどだった。スピーチの中で特に印象深かったのは韓国の教育問題についてである。

スピーチをした学生の中でも教育問題について論じた学生が一番多く、問題の深刻さがうかがえた。韓国の教育問題については大学の講義などで聞いたことはあったが、学生の言葉による生の情報は私の想像を越えていた。韓国は入った大学によって就職や将来のことが決まってしまう学歴社会である。会社は高学歴の学生を求め、学校教育はすべて受験の為にあるようなものであるという。学校の授業においても生徒たちは受験科目以外のものに力は入れず、きちんと取り組まないのが現状であるようだ。中学生や高校生の時期に受験のためだけにすべてを捧げるということは、身体の成長や心の成長に大きく影響を与えると述べている学生もいた。また、ある学生はドイツなどヨーロッパの国々やアメリカの例をあげ、こうなって欲しいという具体的な訴えをしていた。それらのスピーチは全体を通して問題意識が高く、幅広い知識を持ち合わせ、学生一人一人が自分の問題として深く考えているという事がよく理解できた。

出来事の二つ目としては、授業参観があげられる。授業参観では「上級日語会

話」という授業に参加し、日本の学生と韓国の学生がグループになって会話をしたのだが、偶然にもその時のテーマが「受験戦争」であった。私は二年生の日本人学生とペアになり、三年生の韓国の学生二名と会話をする事になった。しかも韓国の学生の一人は、スピーチ大会で教育問題についてスピーチをした学生であった。会話の授業の中では、自分が経験した受験について相手に話すという事と、自分の国の受験制度についての意見を話すという二つのことを行った。自分の国の受験制度については、一度通ってきた過程であるのにもかかわらず、それを簡潔に要点をおさえて意見を述べるということは大変難しかった。また、日本の高校生の大学進学率や入学金についてなども正確な知識がなく、日本のことを教える立場としてとても恥ずかしくなった。それに対して韓国の学生は、学歴社会の中の厳しい受験戦争についてきちんとした問題意識をもち、現状の問題点やこうなって欲しいという未来像についても考えていて、それを自分の意見として述べることができていた。二人は話の途中でつまずきながらも、韓国語を交えながら、協力して一生懸命話してくれた。その時の真剣なまなざしが私にとって大変印象に残っているのである。

三つ目の出来事はホームステイである。私は同じ 4 年生の学生と二人で、4 年生のパク ジョンさんの家にお世話になることになった。パクさんには弟さんがいるというのだが、高校 3 年生の受験生ということで、そのような大事な時期にホームステイを引き受けていただいて、感謝の気持ちでいっぱいだった。そして、弟さんが夜中近くに帰宅し、次の日の朝早くから出かける姿を見て、受験生の実態をうかがうことができ、衝撃を受けたのであった。

今回研修を通して、私は韓国の教育問題というものに接する機会が多くあったように思える。大学に身を置く自分にとっては遠い過去のような問題になってしまったが、これをきっかけに、日本の教育問題やそれに付随するさまざまな問題について自分自身の中に問題意識を置き、自分たちの世代が真剣に考えていかなければならないことなのだと強く感じた。このような機会を与えていただいたことに感謝したい。

「伝える」ことの難しさ

信州大学人文学部４年
佐藤智佳子（日本語教育学専攻）

10 月 25 日、仁川空港に降り立ち、カトリック大学校のみなさんの出迎えを受け、そしてバスへと乗り込んだ。空港には日本人も多く、外国に来たという実感は湧かなかったが、バスに乗り込み、日本と反対側の車線を走っていることに気がついて、やっと外国に来たという実感が湧いた。その日から１週間を無事過ごすことが出来るのかという不安とどんなことが待っているのかという期待が入り混じった中、私の韓国言語文化研修が始まった。

私にとって二度目の海外、そして二度目の韓国となる今回の韓国言語文化研修。カトリック大学校にお世話になるのは二度目であったため、一度目に比べると、気持ちの面では余裕を持つことが出来たように思うが、カトリック大学校の学生のほとんどが初対面であり、私よりも年下の人が多かったため戸惑い緊張した。しかし、行事を通じて行動を共にしたり、話したりしていくうちに、交流を深めていくことが出来た。今回の韓国言語文化研修で、様々な行事が計画されていた中で、私にとって、最も印象に残っているのは、私たち四年生が授業をさせていただいた日本語教育実習と、斉藤有紀恵先生の「高級日本語」の授業に参加させていただいたことである。

日本語教育実習では、二年生を対象とした「中級日本語会話Ⅱ」の授業に三人一組で一時間担当させていただいた。ロールプレイや文型カードを用いて、道の尋ね方や道案内の説明の仕方ができるようになることを学習目標にした。外国語話者に対する初めての授業であったため、緊張し不安を抱えながらの実習だった。何よりも、学習者の視点を考え、どんな反応が返ってくるかを具体的に考えることが難しかった。様々な反省点はあるが、海外における日本語教育の場を実際に経験できたため、よい経験になった。また、実習終了後、同じ内容を扱った斉藤先生の授業を見せていただいた。日常生活に沿った自然な状況や談話からの文型導入や教材の作り方などの重要性を改めて知ることができた。また、教室の雰囲気作りや、授業の進み方を見せていただく貴重な機会になったと思う。

斉藤先生の高級日本語の授業では、日本と韓国の受験戦争に関するフリートーキングに参加させていただいた。海外で行われている日本語の授業に参加させていただくということは初めてであり、緊張している反面、楽しみでもあった。フリートーキングでは、日本と韓国の受験や進学率についての違いを比較しながら、話し合いを進めていった。両国間の大学入試制度の違いや教育制度の違いを聞いて驚くことが多かった。私が入ったグループの学生は四年生の二人で日本語のレ

ベルが高かったが、実際に話しあっていくうちに、やさしい日本語を使っての説明が難しかったり、的確に意味を伝えられなかったりという事態が生じ、うまく伝えることの出来ない自分に対して苛立ち、自分自身の勉強不足を改めて感じた。そして、日本語の難しさを感じさせられたようにも思う。

今回の研修では、韓国語講座が一回設けられていた。韓国語講座は、ハングルの歴史や挨拶、簡単な自己紹介などが取り上げられたため、初心者である私でも興味を持って取り組むことができた。また、その日の午後には、ホームステイが予定されていたため、ホームステイ先の家族に挨拶できることを目標に即席の韓国語を覚え、必死に暗記した。そして、ホームステイでは、遅い時間だったにもかかわらず家庭料理でもてなしていただくなど、一泊という短い時間ではあったが、一般家庭の雰囲気に触れることが出来たことはとても貴重であった。また、韓国の伝統的な文化だけでなく、現在の韓国の様子を見、韓国を肌で感じられ、時間は限られてはいたが有意義な時間を過ごすことができた。

今回の研修を通じて、日本と韓国という国のつながりだけではなく、個人間の交流関係を築いていくということが重要であることを実感した。実習をさせていただくという立場での学生との関わり方や友人としての関わり方などを考える良い機会になった。また、日本語を日本語で説明する難しさや、分っているようで分っていない言葉の意味。日本語を教える立場としては、日本語を学び、教えるということはどれほど大変で困難なことであるかを実感し、韓国語では、慣れない発音や文字に取り組み、他言語を学ぶということはいかに大変であるのかを痛感したというように、言葉に対する考え方や取り組み方を見直す良い機会になった。

今回の韓国文化研修では、カトリック大学校のみなさんをはじめ、多くの人に支えられ、配慮していただきながらの研修だった。温かく迎え、色々な場面で配慮していただいたおかげで、充実した一週間が過ごせたように思う。カトリック大学校のみなさんや温かく迎えてくれたホームステイ先の家族のみなさんに心から感謝している。

再会と新たな出会いから国際交流を考える

信州大学人文学部４年
2003年度派遣交換留学生
向出真理子（日本語教育学専攻）

名古屋空港を離陸して約２時間、仁川空港に降り立った。昨年１年間留学していた韓国に８ヶ月の時をおいて再び訪れるというのは、久しぶりに自分の故郷に帰省するのと似た感覚である。空港から市内へ向かうバスの窓から見える風景は日本かと見間違うようなところもあるが、高層アパートがいくつも立ち並び、ハングルで書かれた看板であふれた風景が、自分が韓国にいるということを教えてくれる。そしてだんだん見慣れた街並みが目に入り、バスがカトリック大学校の正門をくぐったとき、とてもなつかしい気持ちとまるで留学していた頃にタイムスリップしたような不思議な気持ちになった。

私が韓国文化研修に参加するのはこれで３回目になる。今回の韓国言語文化研修に参加するにあたって設定した目的の一つに「再会」があった。日本と韓国は外国と言えども、他の外国に比べ行き来がしやすい距離にある。しかしながら「行きたい」という気持ちはあっても、時間や金銭的な条件がそろわなければそう簡単には行動に移せるものではない。留学を終え、帰国してからの私はまさにこの状態であった。日常のふとしたときに韓国での生活や友人たちを思い出していたが、一年も経たずしてカトリック大に行けるというのは願ってもない機会だった。また今回は監事という、信大とカトリック大との橋渡しをする役割を任せられることになった。このような大切な役割を務めることができるか不安もよぎったが、カトリック大での留学を活かせる役割であり、この役割を務めることでも私が今回の研修旅行に参加する意義があると思った。

研修の一週間を通して、私が心待ちにしていた再会を実現することができた。まず、日語日本文化専攻の先生方、学生のみなさんとの再会である。先生方は、昨年何度も私の支えになったやさしい笑顔で迎えてくださった。昨年２、３年生だった学生のみなさんは、学年とともに日本語能力がさらに高くなっていたように思う。学生の中には、私がインターンシップ海外日本語教育実習で教壇実習をしたクラスの学生もおり、私を見るなり「先生！」と呼んでくれた。覚えてくれていたことと、未熟ながらも先生とみてくれていたことにうれしくなった。今回は実習生と学生としてではなく、同世代の学生同士として最近の日韓の若者文化や将来の話をしたり、研修行事を楽しむことができた。次に、国際交流処の先生方、寮の先生と友人たちとの再会もあった。皆「韓国語、全然忘れてないね」と言ってくれたが、私自身は言いたいことばが出てこないもどかしい場面が多々あり、

話せなくなっていることを痛切に感じた。帰国してから韓国語で考えたり韓国語を使うことが圧倒的に少なくなっていたが、これ以上忘れないためにも、さらに韓国語能力を伸ばすためにも、日語日本文化専攻の学生に負けないくらいがんばりたいと強く思った。

再会だけではなく、今回新たな出会いも多くあった。新たな出会いがある度に、私は自分の世界が広がっていくことに喜びを感じる。同時に、この個人対個人のつながりは、信州大とカトリック大の交流、さらに日韓の交流の根底にあるともいえる。後輩や、カトリック大の学生の皆さんによって、この交流をさらに広げていってほしい。

たくさんのうれしい再会と新たな出会いをとおして、あらためて「国際交流」を考えるきっかけとなった。電子メールをはじめとしてさまざまな通信機器が発達している現代ではあるが、文字や声だけのやりとりでは時に誤解を生むこともある。今回、実際に顔をあわせた交流を経験した誰もが、もっと相手のことを知りたいという想い、それと同時に自分のことを伝えたいという想い、別れるときの切なさ、そしてまた会いたい、などという想いを持ち、ことばや文化的背景を越えて互いを理解し合うことができる、ということを感じたのではないだろうか。今回初めて参加した2、3年生が積極的にカトリック大の学生と行動をともにし、お互いが一生懸命日本語で会話をしながら、逆に韓国語を教えてもらっている光景はとてもほほえましかった。一週間で築きあげた友情を絶やすことなく、交流を発展させてほしいものである。そのために、母語として外国語の一つとしての日本語を見つめ直すともに、韓国語および韓国の歴史・文化についても知識を深める努力が必要である。母語・母文化が異なる国際交流では、心を開いて、互いに歩み寄っていくことを常に心がけたい。今回の研修に参加して、「また再会を実現したい」「また韓国にきたい」と強く思った私にとっても、大きな課題である。

最後に、今回も細かなところにまで配慮の行きとどいた手厚いおもてなしをしてくださった、カトリック大学校の李先生をはじめとする先生方と学生の皆さんに心から感謝を申し上げます。

友達として打ち解けあうということ

信州大学人文学部３年
青山恭子（日本語教育学専攻）

韓国言語文化研修の一週間の韓国での体験は、私にとって全てが初めてで、たいへん貴重なものになった。

私はカトリック大学校に着くまで緊張が続いていた。初めての海外で初対面の学生と交流するということを、とても難しいことのように思っていたからだ。共通点は同じ大学生であることと、私たちの話す言葉が日本語で、彼らがその日本語を学んでいるということしかない。私はとても韓国に関心があるというわけでもなかった。何を喋ったらいいのか、私が話すことに興味を持ってくれるだろうか、何よりも私は彼らに興味を持てるのだろうか、そんな心配ばかりだった。

しかし、そんな心配はカトリック大学校に着いてすぐなくなってしまった。私からはうまく声をかけられなかったのだが、カトリック大の学生が話しかけてきてくれた。普段、同じ日本人同士で友達になる以上に、すんなりと友達になれた。韓国人は初対面でも日本人が聞かないような私的なことを聞く習慣があると聞いていたが、私は嫌な気がしなかった。むしろ、私たちに興味を持ってくれているのだ、とうれしく思い、いろいろなことを話した。私はカトリック大の学生が用意してくれたお菓子が珍しくて、韓国人の友達にこれはなんて言うお菓子？と聞いたり、よく食べるの？と聞いたりした。韓国の学生はそんな些細な質問にも一生懸命答えてくれた。日本と同じ味のものや、同じものが好きだということがわかれば、それだけで私はお互いの共通点を見つけられたようでうれしくなった。初対面の日本人同士と違うことは、片方が慣れない日本語で一生懸命話し、もう片方がやさしい日本語を探しながら話しているということだけだった。

私はこの研修旅行で韓国が好きになった。その大きなきっかけとなったのが研修の４日、５日目に行われた、ホームステイでの体験だ。

私たちは韓国風に常に女の子同士で腕を組んで町を歩いた。韓国では普通のことのようだったが、自分が受け入れられている感じがして、腕を組んで歩くのが楽しかった。パートナーは私たちのために先にどこに行くか計画してくれていた。移動の電車の中では、パートナーが使っている日本語のテキストを見せてくれて、これはよく使う言葉？と聞かれたり、日本のどんなものに興味があるのかを話してくれたり、話題が途切れずに続きとても楽しかった。ソウル市内に出たのはその日が初めてだったので、見るもの全てが物珍しく、日本について聞かれるのと同じくらい、韓国のことも尋ねていた。夕食はパートナーたちがよく行くという、

日本で言うファミリーレストランのようなところですませた。それまでは食事は大学内の学食や焼肉だったので、同じ大学生の普段の放課後を過ごせたようでとても満足だった。

初めての海外ということで疲れがたまってしまったのか風邪をひき、ホームステイ先のお宅に泊まらせていただいた翌朝、咳き込んでしまっていた。するとパートナーのお母さんがシロップ状の風邪薬をスプーンで直接飲ませてくれた。私の本当のお母さんのようだった。お母さんは日本語が話せないし、私も韓国語はわからないが、お母さんは身振り手振りで、テレビで放映されていた日本人関連のニュースのことを伝えてくれた。朝食もお母さんが用意してくれていた。お母さんの手作りキムチをたくさんごちそうになった。お母さんは朝食のあとに電話を何件もかけ始めた。パートナーが、お母さんは日本人が来ていることを友達に話している、と説明してくれた。帰りには韓国海苔とお母さんの手作りキムチをたくさんいただいた。お母さんにこれほどまでに歓迎してもらえるとは思っていなかったので、とてもうれしかった。

最後の全体での食事会のあと、パートナーたちとはお別れをしなければならなかった。けれども、ホームステイ中に教えてもらった韓国語で話したり、日本語と似ている発音の韓国語を教えてもらったり、なかなか別れられずにいた。パートナーは昔からの友達のようだった。また絶対に会おうね、連絡するね、と言って最後は別れた。

今回の韓国文化研修では、学内の交流やホームステイを通じて、異文化の人と交流するということが少しわかった気がする。異文化同士だからといって、友達になることに何の変わりもないということだ。友達になれば、相手が日本について聞いてきたときに、私もきちんと説明してあげたいから、自然と自分の国について知ろうとする。友達のことだから相手の国について知ろうとする。自分や相手の国や文化ばかり先に目が行ってしまいがちだが、まず相手に興味を持って話すことが異文化間交流の大切な一歩だと思った。自分の国についていくら知っていても、相手の文化に興味があっても、相手と打ち解けられなければ、それは文化間の情報交換であって、交流でなくなってしまう。異文化間といっても、構えてしまうことはない。友達になればいいことだと思った。この一週間での出会いを大切に、一時のものにせず、これからも友達でいたいと思う。

韓国人学生の温かさと熱意

信州大学人文学部３年
荒井典子（日本語教育学専攻）

目の前にそびえ立つ高層ビル。ホームステイのパートナーに連れられるがままに向かった先はいく棟も立ちはだかっている団地であった。20 階以上あるだろう高さのビルを前に、「ここだよ。」と言われ、私は少し尻込みしてしまった。

韓国言語文化研修も終盤に差しかかり、いよいよホームステイをさせていただけるときを迎えた。ホームステイは今回私が楽しみにしていたことの一つである。韓国の一般家庭にお世話になることは、韓国の文化や生活スタイルを知るのに絶好の機会だと感じていた。しかし移動するバスの中での緊張といえば、言いようのないほどであった。楽しみである一方で、どんなご家庭なのだろう、私たちを受け入れてくれるのだろうか、挨拶はどうすればいいのか、など必要以上の心配や不安があった。

パートナーがドアをたたいた。内側からドアが開いた。パーッとあふれる光、そこにお母さんが立っていた。緊張は最高潮を迎えていた。「こんばんは。」とお母さんが言った。そのとき、一気に緊張がほぐれた。私たちはたどたどしい韓国語で挨拶を交わし、部屋へと向かった。あとで聞いたところによると、お母さんもずいぶん緊張していたらしく「こんばんは」という言葉をパートナーに教えてもらい、練習していたそうだ。私はそのような歓迎のされ方を大変うれしく思った。

私は、アジアの各国を訪れると考えてしまうことがある。それは「過去のこと」についてである。これまでにも中国や韓国を訪れたことがあるが、心の片隅で「日本についてどのような理解がされているのか、嫌な思いのままいる人もいるのではないか」という考えがあった。聞いた話であるが、現在でも、電車などで日本語を話していると冷たい目で見られたり、嫌がらせをされたりするということだった。正直に言えば私たちの世代になると、戦争への意識は薄れ、実際昔起こったことについてあまり実感がわかないが、靖国神社の参拝をめぐって、また慰安婦問題が今でも取り上げられ、完全に両者が和解したとはいえないこの時代に、日本人として韓国を訪れるということはどのようなことなのだろうと考えてしまう。もっとも、今回の目的は日韓の言語文化交流である。お互いを理解し、仲良くなることが求められる。私自身も、このようなことは多少心に浮かぶ程度で、韓国は好きな国のひとつであるし、韓国の一般家庭に入れることを楽しみにしていたのであるが。

こうした思いがあったため、パートナーのご両親に温かく迎えてもらったことは本当にうれしかった。その日の夜は、パートナーとともにホームページを見たり、写真を見たり、大学のことやそのほかいろいろな話をして盛り上がった。今回初めて出会った人とは思えないほど馴染み、いうまでもなく、そこに日韓の壁はなかった。

堅い話もした。パートナーは、日本の経済、歴史、制度など日本のさまざまなことに関して興味があり、勉強への熱心さが伝わってきた。特に印象に残っているのは「伊藤博文」の話である。伊藤博文は1909年韓国人青年安重根によって暗殺された。パートナーはそのことについて、小学生のころに習ったとき、伊藤博文は悪者として教えられていたが、高校大学と進学するにつれて、むしろいい政策をしていたのではないかと考えるようになった、と話してくれた。私はこのことを聞いたとき、国という枠組みを越えて情勢を見ることの大切さを感じた。歴史的な事柄はたいていどちらか一方の側からの視点でしか見ることができず、被害者のような意識に陥ったり、加害者のような感覚を持ったりする。しかし、国を越えて両方の視点から見てみるということは国際理解において重要な点であると思う。

また、今回この研修旅行を通して学んだことの一つにカトリック大学の学生の学習意欲の高さがある。日語・日本文化専攻という環境も関係あるだろうが、日本についての関心が高く、積極的であった。さまざまなことに興味を持ち、学ぼうとする姿が見受けられた。そして、将来の夢をそれぞれが持っていた。将来やりたいことがあるからと、その夢に向かう「大学生」の姿を見せられた。将来のことについて話す学生の目はいきいきとしており、身を乗り出すように話してくれた。大学3年という時期にこの研修旅行に参加して、就職、進学、留学などさまざまな選択肢を持つ私たちであるが、このように夢を追う人たちの姿を目の当たりにして、改めてこれからの進路を考えさせられた。就職できなければフリーターで、という「とりあえず」の将来ではなく、自分のやりたいことに向けて突き進んでいくことのすばらしさを実感した。

この1週間の研修旅行で学んだことは本当にたくさんある。普通の観光旅行と違い、実際に韓国の大学生の意見や姿と出会い、また、一般のご家庭にお邪魔させていただき、貴重な体験となった。韓国の学生の温かさと学習意欲の高さと将来への熱い思いを知ることができて、自分自身の力の礎となった。

日韓の恒久交流を目指して

信州大学人文学部３年
臼井啓祐（日本語教育学専攻）

ぶらりと書店に行き、目に付くのは韓国についての雑誌である。ガイドブックから韓国人俳優、韓国映画を紹介しているものなど実に多種多様である。それらは書店内に点在しているのではなく、きちんと書店の一角を担っている。

僕はこの流行を非常に好意的に見ている。なぜならこれによりさらに両国が密接になればと願うからである。しかし、正直これほどまで、賑やかになるとは思わなかった。少し冷静で消極的な意見を述べるとするなら、今の韓国ブーム（俗に韓流と呼ばれている）は張りぼての城のようである。たしかに「冬のソナタ」はこの一大ブームの立役者である。そして四天王と呼ばれる俳優や彼らの出演映画がその両翼を担っているのは間違いない。しかし「冬のソナタ」以外のドラマはそこまで人気がなく、K-POP は残念ながらほとんど日本で受け入れられていない。さらに最近の映画も「シュリ」や「猟奇的な彼女」のような一昔前の作品と比べればそれほど観客を集めることができていない。そして一番の問題がこのブームは日本の中年層によって成り立っているということだ。それが悪いことだとはまったく思わないが、影響力が強い若者たちはこの一連の流行にはたいして感心を示していないのである。確かに表面上の賑やかさは絢爛たる城のようであるのだが、同時に、いつ終わるか、また崩壊するか分からない脆弱さを持ち合わせている。これが現在の日本における韓国ブームではないかと認識している。

さてそんな韓国ブームの最中、10 月 25 日から 31 日の 7 日間という日程で第四回韓国言語文化研修が開催された。信州大学と学術交流協定を結んでいる韓国カトリック大学校を訪れ、向こうの学生との交流を通して、言語的、文化的及び学問的な視野を広げるというものであった。わずか一週間の滞在であったが、非常に内容の濃い七日間で心身ともに充実した研修旅行となった。出発する前は信州大学からの男子学生は私一人ということで緊張していたが、毎日交代で共に寝てくれたり、いつでも私のそばに誰かしらいてくれて、頻繁に話しかけてくれた。中にはまだ不安定な日本語能力の学生もいたが、どうにかして伝えようというその熱心さを見ると心が温かくなり、こちらも今回の研修旅行への思いを伝えたい気持ちが溢れ出て、自然と会話が弾んだものである。民俗村観光やホームステイなどは韓国文化をより具体的に感じることができた。さらに帰国前夜には男性用の部屋に 10 人以上の人が集まってくれ、皆で飲んだり話をしたりした。オンドルの暖かさと心地よい疲労感に襲われ、日本語と韓国語が交錯する中でふと感じた

のは、皆の心や国際交流の温かみだった。そのときは日本人というよりも、一人の同じ人間としてそこにいたような気がする。このように様々な経験を積むにつれ、今回参加して本当によかったと思うようになった。

また、パートナーであった、マラさんは本当に日本の文化について明るかった。その知識の深さは日本人である私たちが唸るほどである。ホームステイのときは戦国時代について、幕末について語ったものだ。しかも織田信長、徳川家康といったメジャーな武将について語ったのではなく、徳川四天王の一人本田忠勝についてやら、伊達政宗や毛利なら天下を取れたのではないかといった仔細なことが話題に挙がった。そしてそういった知識が日本語習得の補助になったのか、彼の日本語の能力は非常に高かった。その実力は、お世辞抜きにしても専攻内で一、二番ではないだろうか。来年一年間、日本の大学への留学が決まっているそうなので、ぜひさらに磨きをかけてほしい。

さて、マラさんたち学生と交流して感じたのは日本人と韓国人の相手の国の文化の収受の仕方や程度のギャップである。もっとも自発的に日本語や日本文化を勉強しようとしているのであるから彼らを韓国人の平均像として見てはいけないかもしれない。しかし日本における韓国ブームとはやはり異なる。例えば、マラさんは日本の映画やドラマや音楽など、選り好みせずさまざまなものを日本の文化として受け入れていた。このようなことはマラさんだけでなく他のほとんどの学生でも同様であった。しかし現在の日本における韓国ブームでは少し事情が違う。皆がある特定の俳優を追いかけるといったかなり狭いものである。つまり、韓国の学生の関心や流行は個人単位で行われており、非常に多種多様であるのに対し、日本人は基本的に、全体に敷き詰められた流行の上を行き来しているだけのようである。その点において私たちは、彼らの熱心さを見習うべきではないだろうか。

さて、来年は1965年に日韓基本条約を締結してから40年という節目の年にあたる。『日韓友情年 2005』と銘打ってさまざまなイベントが計画されているようであるが、より深い交流となり、両国の距離が今以上に縮まればと思う。またこの韓国言語文化研修がこれからも継続して開催されて、日韓の友好に一役買うことができればと願う。

韓国言語文化研修に参加して

信州大学人文学部３年
奥田江美子（日本語教育学専攻）

「ハナ、ドゥルー、セッ」
カメラを向けると、みんなの笑顔が一斉にこちらを向いた。その笑顔はとても輝いていて、日本人も韓国人も、交流を楽しんでいる様子がとても伝わってきた。

私は今回の研修で、公式カメラ係を担当した。せっかくそのような係になったので、「心を開いて礼を尽くす」という全体目標の他に、個人として「カメラ係からの視線を大切にする」という目標をたてて研修に臨んだ。ただ研修に参加するよりも、写真を撮ることを通して、初めて訪れる韓国の文化や風習その他に、より深く気付くことができたら、と考えていた。

私が研修中で一番楽しみにしていたことは、日本語教育の現場への参加であった。今回はフリートーキングという形で参加させて頂くことができて、とてもよい経験になった。しかし、それと同時に少し不安なこともあった。私が英語を学んでいるときには、英語母語話者との会話はとても勉強になるし、教科書や辞書に向かって勉強しているときよりも、頭の中に英語が入ってくる。だから、韓国の日本語学習者にとっても、フリートーキングの時間はおそらく大切な勉強の時間であって、その時間に参加させて頂くということは、自分の発言に責任を持たなければならないということなのだ。私は責任を持ってフリートーキングを行えただろうか？そんな不安があった。けれどもその不安は、フリートーキングを行った次の日に解消された。フリートーキングでは、「梯子酒」という日本語について、日本語学習者に説明したのだが、私と同じグループだった韓国人学生がその次の日に早速、「梯子する」という言葉を正しく使っているのを耳にしたのだ。私たちの説明した日本語を覚えてくれたことが嬉しかったし、また、韓国人学生の強い学習意欲を感じることもできた。

他に楽しみにしていたことは、日本語スピーチコンテストである。残念ながら審査員として参加することはできなかったのだが、コンテスト参加者全員の写真を撮ることで、ひとりひとりに対する印象が深まり、それぞれのテーマについて、更に考えることができた。自分の伝えたいことを母語以外の言語で話すことは大変なことだと思うが、それにも関わらず、まっすぐに前を向き、堂々と話す参加者の姿を見ると、やはり順位など決めることなく全員に賞をあげたい気分になった。

もうひとつ楽しみにしていたのは、韓国人のお宅でのホームステイだ。私が泊

めて頂いたお宅は、パートナーとお父さん以外、日本語を話せないご家族だったが、それでも、お母さんもお姉さんも私をあたたかく迎えてくださり、おいしい韓国の家庭料理をいただいた。またお父さんは、夕食の後に、初めて韓国に来た私を市内のドライブに連れていってくださったりして、一泊という短いステイではあったのだが、韓国を満喫することができた。ソウルタワーから見たソウルの夜景は、東京タワーから見た東京の夜景と似ていて、私は今本当に韓国にいるのだろうかという不思議な感覚に陥っていた。

また、日本人と韓国人が集まっているときや集合写真を撮るときにも、本当に韓国にいるのだろうかという不思議な感覚になることが多々あった。日本人と韓国人の顔立ちや雰囲気は、どちらか区別がつかないくらい似ていて、外国にいるという実感が沸かなかったのだ。けれども、お酒をつぐときには両手を使わず、片手は添えているだけという場面や、お酒をついでもらったら相手から少し顔をそむけて飲むというような場面を目の当たりにしたときは、日本とは違うその習慣に、やはり韓国にいるのだということを感じることができた。

韓国は松本よりも少し寒いと聞いていたが、その為か、民俗村の紅葉が鮮やかな黄色と赤色でとても美しかったのが印象深い。レンズを通して、色彩的にも韓国を感じることができたその写真は、私のお気に入りでもある。

歓迎会で私は、個人的に辛い食べ物が苦手なので、研修中に韓国の辛い料理を少しでも食べられるようにしたいと言ったが、カトリック大学の学生はそれを覚えていてくれて、私と一緒にご飯を食べるときは、大丈夫？食べられる？と気にしてくれた。その他にも韓国の学生は、私たちにとても気を遣ってくれて、本当にあたたかいおもてなしを受けていると強く感じることができたので、私も礼を尽くして辛い料理にも挑戦した。すると日本にいたときよりも辛いものがおいしく食べられるから不思議であった。

研修を終えて一番感じたことは、あたたかく迎えてくれた韓国の学生にお返しがしたいということだ。送別会のときに、カトリック大学の広報・記録係の学生が、「お互い写真係の仕事、お疲れさま」と声をかけてくれたことがとても嬉しく、韓国から日本に来てくれた際には、私たちも同じようにおもてなしと交流ができるように心がけようと強く感じている。

日本語教育の視点から学んだこと

信州大学人文学部3年
高田千穂（日本語教育学専攻）

去る10月25日から10月31日までの7日間、韓国のカトリック大学校で行われた2004年度第4回韓国文化研修に参加させていただく機会を得た。今回のプログラムでは信州大学から教職員を含めた24名が参加した。7日間にわたる研修で、授業参加・ディベート・韓国語授業・民俗村見学・ホームステイ・講演の聴講など、そのほかにも多くの行事に参加した。この7日間で、日本語教育という立場からの勉強をさせていただき、韓国の伝統的な文化や食文化を学び、多くの韓国人学生と仲良くなって意見を交わしたりおしゃべりをしたりと本当に有意義なときを過ごすことができた。その中で、特に印象的であり、日本語教育という立場から学び考えることが多かったのが、3日目に行われたテーマトークの授業への参加であった。

このテーマトークの授業では、毎回「兵役」や「ダイエット」などテーマを与えられそのテーマに関するいくつかの設問について考えるそうだ。今回私たちには「受験戦争」というテーマが与えられ、韓国人学生二人、日本人学生二人で1つのグループを作り「受験戦争」に関する設問に取り組んだ。そこで学び、また考えたことについて述べたいと思う。

まず一つ目に、反省したことは、今回のテーマトークの授業のねらいをきちんと把握しないまま臨んでしまったということであった。私のグループでは韓国人学生は私たちよりもずいぶん年上だったためか、話し合いはとても盛り上がり韓国人学生からの意見を多く聞くことができた。まだ日本語の勉強を始められて長くないということだったのだが、韓国人学生の日本語はとても上手で意見交換にほとんど差し支えなく、また説明するために適切な言葉が見当たらないときにも諦めず話をしてくださり、私はそのことをとても嬉しく感じた。しかし、当然のことながら細かい言い間違いや文法の間違いもあった。私はその間違いが意見交換の内容に直接関わらない限り指摘せずにおいた。しかし、今回の授業のねらいが何であったのか、例えば正しい日本語を身につけることだったのか、それとも母語話者と日本語を使って話すことで発音を学んだり、あるいは自分の日本語に自信を持ったりすることだったのか、日本人学生との意見交換だったのか、などを正確に把握しておけば、もっとねらいに見合った授業参加ができたはずである。

二つ目に、この授業以外でも感じたことなのだが、自分の自国についての知識が少なすぎるということを痛感した。「受験戦争」というテーマにおける設問では、

自分の考えを述べるものもあったのだが、中には「あなたの国の進学率はどのくらいですか」「あなたの国の学費はどのくらいですか」という知識を問うような問題もあった。この問いに私たち日本人は正確な知識を持っておらず曖昧にしか答えられなかった。しばらく互いの意見交換をしてから各グループで発表をしたのだが、日本人同士の意見も食い違いがあった。また、民俗村見学をしたとき、私たちは伝統民俗館に入ったのだが、一緒に観光をした韓国人学生は一つ一つこれはどういうものかを説明してくれた。私が逆の立場であったらこれほど詳しく丁寧に説明できるだろうかと考えてしまった。今回のテーマトークの授業では、一方的に教える立場ではなく互いに意見を出し合い考えを深める場であったことに助けられたが、自分が日本語を教える立場に立ったとき日本について知らないということは致命的であり、伝統的な精神や文化だけでなく、日本の現状についての知識も必要であるのだと感じた。

三つ目に、事前研修で沖先生がおっしゃったことである。先生は「韓国の文化、つまりは異文化に触れたとき、はっとすることもあるでしょうが、驚かずに受け容れてください」ということをおっしゃっておられた。私は異文化に触れ驚くことがなぜいけないのか、その意味がよく理解できずにどういうことなのかをずっと考えていた。しかしこのテーマトークの授業を通して少し分かったような気がした。韓国では受験戦争が激しく、学生時代は朝早くから夜遅くまで勉強をしているという。また、受験科目以外の授業は削られることが多く放課後のクラブ活動も日本ほど充実していないという話をこの授業で知った。私は「そうなんですか」とその事実だけを受け容れることに努めたが、内心ではとても驚いてしまっていた。しかし、そこで思ったことが、驚くということは、ただ驚きだけに止まらず、そのほかの感情も隠れているのではないかということだ。例えば今回のことでは、韓国と日本を瞬時に比較し、韓国の受験戦争はとても大変そうで日本は韓国ほど受験戦争が激しくなくてよかったといった感情を持ってしまった。「驚く」ということは、自分や自国文化の常識を物差しにして相手や異文化を測ることの結果なのかもしれない。そしてそれは当然のことながら無礼で相手を厭な気持ちにさせてしまうだろうと思う。初めからこのことに気が付いていればよかったと後悔しているが、一方で今は「驚かず受け容れる」ということを常に心に留めていたいと思っている。

今回の研修では自分にとって反省、学んだことの多い貴重な経験となった。このような研修に参加する機会に恵まれたこと、またこのプログラム成功のためにご尽力くださり、カトリック大学校での研修中には手厚く歓迎し親切に接してくださった先生方、学生の皆さんに心から感謝している。この研修で得たものをこれから存分に活かしていきたい。

国際交流に必要なもの

信州大学人文学部３年
玉井芳恵（日本語教育学専攻）

10月25日から31日の7日間、カトリック大学校で行われた韓国言語文化研修に参加した。外国でその国の人と接し、話した事がなかった私にとって、この７日間の研修は実りの多いものになったと感じている。以下、研修中に経験させていただいた貴重な体験をあげ、その中でとくに２つの研修項目について感じたこと、考えたことについて述べていきたい。

１．参加授業

フリートーキング形式での参加型授業を研修期間中に2回、経験させていただいた。カトリック大学校の学生が普段使用している教室を使わせていただいて、まずその教室内の雰囲気に驚いた。少人数であることも手伝ってか、意見交換がとても活発で、カトリック大学校の学生が、「授業は聞くものではなく、参加するものだ」という意識を持っているように見えた。そして、その教室内の雰囲気は担当教官の先生が作り出しているように感じた。私が経験させていただいた授業はどちらも玉懸先生の指導によるものだったのだが、先生の授業の作り方、雰囲気の作り方などは、ただ感心するばかりだった。学習者を積極的に学ぶように指導する技術を見せていただき、本当に勉強になったと思う。

また、このフリートーキングで、カトリック大学校の学生の学ぶ姿勢に自分の甘さを感じた。とりわけ、10月26日のフリートーキングで同じグループで討論したカトリックの学生の討論に臨む姿勢には頭が下がった。討論中の信州大学生が話す言葉の一つ一つに真剣に聞き入り、それに対して自分の意見を必ず返してきてくれた。初対面である私たち外国人と積極的に交流をし、その実りを自分のものにしようとする姿勢は、私にはなかった点だったと、教えてもらったと思う。付け加えて、異文化交流の考え方という点でも学ばせてもらったことがある。私は異文化交流というのは、受身の交流であると考えていたところがある。しかしそうではなく、自国の文化をまず自分自身が理解した上で交流相手に紹介し、相手に理解してもらう、そういう能動的な交流が活発な異文化交流の基礎となることを実感として学ばせてもらった。このフリートーキングで一緒に学んだパクさんという学生は、母国・韓国の伝統的な食べ物を持ってきて、私たちに食べさせてくれた。そしてその食べ物の一つ一つの説明をしてくれた。私はパクさんと同じグループだったので日本の伝統的な行事食について説明したり、パクさんから

より詳しい説明を聞いたりした。この参加授業の時間は本当に学ぶことが多く、異文化交流ということは、相手の文化を知るだけではなく、自分の文化を知ってもらうことがよりよい交流に繋がることや、その姿勢が自分には不足していたことに気付くきっかけとなった。出発前に沖先生が自分の母国の文化を知らずに国際交流は成り立たない、とおっしゃっていた本当の意味が理解できたと感じた。

2．カトリック大学校の学生自治の質の高さ

今回の韓国言語文化研修は、カトリック大学校内の研修院に宿泊させていただいた。研修院での生活のすべてはカトリック大学校の学生に世話をしていただき、その学生の自治の質が高かったことが印象に残っている。院の開閉の管理はもちろん、信州大学総数20名を超える毎回の食事の段取りまで学生で行ったと聞き、組織作りが的確にされていることにとても感心した。

研修の日程作りも、授業が通常通りに行われている中で日程に沿って大人数を動かすのも並大抵のことではなかったことと思う。私は自分だったら出来るか、と考えてみたが、計画、準備、実行、全ての段階で今の私では出来ないことばかりだと感じた。同年齢の学生がこんなにも適切な自治を行っているのか、とただ感心するばかりだった。

3．研修を振り返って

2004年度第4回韓国言語文化研修を振り返り、本当に多くのことを経験させていただいたと思う。ホームステイをさせていただいて韓国の家庭の雰囲気に触れ、ご家族と交流することもできた。民俗村にも行き、伝統にふれ、民芸品を見て、韓国をずっと身近に感じることができた。今回の研修は≪言語文化研修≫だった。振り返ると言語研修は努力不足で韓国語で交流できたことは少なかった。しかし、文化研修という点ではとても貴重な経験を本当にたくさんさせていただいた。

最後になりますが、異文化交流について考える機会を与えてくださった先生方に心から感謝いたします。そして今回交流を深めることのできたカトリック大学の学生と今後も交流を続け、もっとお互いの国、文化、言語について学んでいくことができたらと願っています。

一つのリンゴに込められた想い

信州大学人文学部３年
2005 年度派遣予定交換留学生
村松咲穂里（日本語教育学専攻）

何でも心で素直に感じよう。出国準備が整った機内の中で、私は一つの目標を立てた。前日まで旅行鞄と格闘していた私は直前まで心構えができていなかった。何か明確に心に留めておかなければ貴重な七日間がただ通り過ぎてしまう。私は少し焦りを感じていた。そうだ、目標を改めて立てよう。初めての国、韓国。ここで何が私を待っているのだろう。どんな人たちと出会うのだろう。いろいろ考えた。一番大切なことはなんだろう。私に何ができるかわからないけれど、未知のこと、良いこと悪いこと、全部経験してそれを素直に受け入れよう。それが私の目標だ。そう思い、「何でも心で素直に感じる」という言葉を今回の研修旅行の目標として、私は日本を飛び立った。

2004 年 10 月 25 日から 31 日の 7 日間の日程で、第四回韓国言語文化研修が実施された。私たち信州大学の学生は、カトリック大学校内にあるセミナーハウスという宿泊施設で、カトリック大学の学生たちと寝食をともにしながら、7 日間の研修を行った。カトリック大学での 7 日間は、私にとって初めての事で、見るもの聞くものすべてが新鮮で、本当に中身の濃い日々だった。私が特に印象に残っていることは、食事をしたときにある。食文化というのは世界の国において、それぞれ独自のものがあり、「食べる」という共通の行動に対して、食物や食べ方などは様々である。私は今回の研修で、韓国と日本の食文化の違いを体験し、それらをとても興味深く感じた。

韓国では食事をする時、茶碗は持たない、床に座って食べるとき立膝をついてもよいといった点は基本的な相違点であり、自身の知識としてあったものだったので特に驚くことはなかった。一つのものを、一つの皿でみんながつついて食べると言う点は日本と同じであった。しかし、少し違和感を覚えたのは、「いただきます(잘 먹겠습니다.)」「ごちそうさまでした。(잘 먹었습니다.)」を言うタイミングである。ホームステイのときにそれを特に感じた。食べるときは何も言わずに食べ始め、食べ終わったあとそれぞれ片付けるといった感じで、「잘 먹었습니다.」と言いたいんだけれどいつ言えばいいのか。「ああ、タイミング逃した！」といった感じでとてももどかしかった。結局パートナーが「今、잘 먹었습니다. って言って。」と促してくれたが、もしそれがなかったら、感謝の気持を伝えることができずに事が過ぎてしまったと思う。日本の食事のあいさつは、

本来食事を作った人に対して言う要素に加えて、食材自体に対していう言葉でもあった。だから日本では、作ってくれた人に向かって言ったり、食べ終わった料理や茶碗の方に向かって言うときもある。韓国ではどちらかというと、作ってくれたその人に言う傾向があるのではないかと思った。私にパートナーが促してくれた時もお母さんが近くに来た時だった。このことは私の個人的観察ですべてがそうであるということではない。ただ、そのように感じたのである。お母さんに対して感謝の言葉として使われていたし、私も感謝の意味を込めて言った言葉であった。

次にホームステイの時、食後のデザートで、柿とリンゴが出されたときのことである。果物が出され、「食べて。」と言われて、私はそのまま食べようと思い、手を伸ばした。するとパートナーが、「先にお父さんとお母さんにあげて。」と言った。私はとてもびっくりした。これまで、自分の両親に対して、先に食べ物を渡すことがなかったので、パートナーの両親に渡したときはとても緊張してしまった。私の家庭を含め、現在の日本の家庭ではそのような習慣はない。この違いは、やはり儒教文化に起因しているのではないかと感じた。韓国では儒教文化が根付き、今も上下関係、長幼の序といった考えは人々の心にしっかりと受け継がれている。そしてそれは社会ないし、家庭にもしっかりと受け継がれている。私が経験したことも、目上の人を敬い大切にする気持の表れであると感じた。習慣というものは、その文化の中で培われた人々の思いや価値観というものが根底にあり、それが行動として現れ定着したものであると思う。私がリンゴを渡したとき、緊張はしていたが、自然と感謝の気持が湧き上がってくるのを感じた。このとき、私にとってこれまで本の中の知識であった韓国文化や思想が、自分のこととして体験でき、そしてさらに心で感じることができたのではないかと思った。リンゴを受け取ったお父さんとお母さんの笑顔は、今でも鮮明に心に残っている。

このように、食文化一つとってもいろいろと違いがみられた。食事のあいさつや習慣は、長い時を経て作られたものである。上記にも記したように、根底にはその国の人々の想いがあると思う。私はこの体験から、韓国人の感謝の気持や人を大切にする気持を感じることができたと思う。次に韓国を訪れる時も素直に心で感じていけたらと思う。

異文化にまるごとつかる

信州大学人文学部２年
新井恵美（日本語教育学専攻）

この研修によって、私が空を飛び異国の地を踏んだ初めての場所は韓国となった。子供の頃から見知らぬ土地に憧れを抱いていた私の心は興味で溢れていた。ところで韓国を「異国」と認識するには少し大げさな時代なのかもしれない。ソウル市から車で一時間ほどの場所にある仁川空港へは、名古屋から空路で二時間かからない。松本から埼玉の我が家に帰省する所要時間より短いのだから。だが所要時間は短くなったとはいえ、私にとって外国は初めて。きっと日本と違うだろう、体まるごと異文化にどっぷりつかってその文化を知ろう、と意気込んでいた。そして実際に体まるごと放り込んでみると、フィルムや旅行雑誌を眺めただけでは得られない、ダイナミックな韓国の文化を感じることができた。

ここでは「感受性を豊かに」の個人目標のもと、韓国と日本を比較することを無意識に、あるいは意識的に行うことで発見した、両者間の異なるものと似ているものについて触れたいと思う。

一見日本人との違いが分かりにくい韓国人やモダンで整備された空港の施設のためか、まるで日本にいるような錯覚に陥る。しかし実際にその場にいると、視覚だけではない感覚器官を通して様々な情報が入ってくる。特に私は匂いと味には敏感に反応していた。例えばトイレの匂い。空港やマンションなどは例外のようだが、普通は使用した紙を便器に流さず横に設置されているゴミ箱に捨てる様式を取っている。そのために強くて甘い匂いの香料が置かれているから、さらに独特で不器用に感じられる匂いがした。

また、その土地に生まれ育った人間や彼らの生活の熱を感じられる。私にとってそれはとても新鮮で興味のそそられることだった。カトリック大学の学生が‘韓国の芸能人はミョンドンを歩かない’と言っていた。韓国では芸能人をみると積極的にボディタッチをしたりする、事に拠ると髪の毛をむしり取られてしまうアイドルもいるとか。ミョンドンはソウル市内にある繁華街で、東京のどこの街とも違う、大衆臭さが漂っている街だ。私がこの意気揚々とした街を案内してもらったのは金曜日の夕方であった。道にもファッションや化粧品のお店にも人間が溢れかえり、道の両脇には所狭しと色とりどりの美味しそうな食べ物や安いアクセサリーを陳列した露店が続いている。トッポギ（韓国のうるち米を使ったお餅を唐辛子の入った甘辛いタレで煮込んだもの）を売る露店のおばちゃんは手際よく荒々しい。濃厚なタレがべっとりと滴り落ちて容器が汚れてもまったく気にと

めないので、私たちは手がべとべとになってしまった。しかし安くて美味しいから結構な量を簡単に食べることができる。こんなお祭り騒ぎの街で有名人が悠長に歩いていられるはずがない。ホームステイ先のテレビ放送で、デモ隊が警官隊に取り囲まれる激しい暴動の映像を見た。映像でしか見たことのない、大学紛争時代の日本をみているようであった。

それでは韓国と日本の似通ったものはどうであったか。カトリック大学の日本語日本文化専攻の学生が「英語習得のために休学を希望している」という発言をしたことに、地域的に近い日本語より英語が有利であるという国際化の波がここでも覗えた。またホームステイ先の学生にはあらかじめ「弟には日本語で話さないでください。全然喋れないから。」と伝えられた。法学を学んでいるという彼女の弟は英語に堪能であった。日本と同様に韓国の若い世代も英語を“世界共通語”として捉え、重要視している。また街の賑やかで派手なハングル文字の看板に混じって英語が多く姿を現す。我が国にも目を向けてみると、英語名の駅ビルは全国あちこちにある。最近ではＲＵＭＩＮＥ（ルミネ）などのフランス語も見受けられるようになったが。加えて、カトリック大学の用意してくれたイベントの中で学生のダンスを鑑賞する機会があったが、彼らのダンスにも西洋文化が見て取れた。両国は急速な西洋文化の享受という面で、大変よく似ている。

そして韓国文化に身を置いて日本人である「自分」を意識し、日本文化について考えた。この研修は母域の文化を知るということの大切さに気づくきっかけとなった。他文化と比較して評価される、日本語の曖昧さや個人主張の弱さなどのネガティブな面も、“日本美”という観念と表裏一体なのではないだろうか、と考えてみたり。また一週間という短い期間での韓国まるごと体験ではあったが、視野が広がり国際交流への意識を変えるきっかけともなった。

これらのことを考えると、私にとって韓国への研修に参加した事は大変有意義であった。

近くて遠い国の文化に触れて

信州大学人文学部２年
粟野　藍（日本語教育学専攻）

機内食を食べ、転寝していると、あっという間に韓国に着いてしまった。大学から空港までは三時間以上かかったのに、韓国まではわずか二時間弱の道のりだった。空港に降り立ってみても、四方八方から日本語が聞こえてくる。日本の空港とほとんど変わらない風景だった。海外に行くということで、気を張っていた私は、拍子抜けしてしまった。カトリック大学に着いてからも、学生は、拙いながらも丁寧な日本語で手厚くもてなしてくれた。海外では右も左も分からないような状況に置かれるものだと思っていたが、このような歓迎にすっかり安心してしまった。緊張が解けた私は、この研修旅行を存分に楽しむことにした。日本とは違う言葉や文字はもちろん、暖房設備や食事、空気や匂いに至るまで何もかもが新鮮だった。

オンドルが暖か過ぎてあまり寝付けないまま、次の日の朝を迎えた。窓から見える景色や、冷たい朝の空気は、日本のそれと大差なく、しばし自分が外国にいることを忘れさせた。寝ぼけた頭で広間に入っていくと、カトリック大学の学生がすでに朝食の準備を始めていて、その姿を見て、自然と背筋が伸びた。着々とスケジュールをこなしていき、日本語の授業を参観させていただいた。日本語教育コースに在籍し、日本語教師になることを目標としてきたが、実際の日本語教育の現場に直接立ち会うのは、今回が初めてであった。日本人教師による英語教育しか経験がなかったので、日本人教師による日本語の授業は何もかもが新鮮で、発見の連続だった。まず驚いたのは、教師が日本語しか使用せず、学生も充分に日本語が理解できているということだった。また、授業の内容は文法的な説明はせず、コミュニケーションに重点を置いたものであったことにも驚いた。日本人教師だからこのような内容になるのかと思い、いずれ韓国人教師による日本語の授業も参観させていただきたいと思った。残念だったことは、日本語教育に対する私の知識があまりにも乏しかったことだ。この授業でどのような工夫がなされているのか、教師が何に焦点を絞って授業を展開させているのか、ということについて知ることができなかった。事前にもっと日本語教育について学んでおけば良かったと、後悔は尽きない。参加型のフリートーキングの授業においても、貴重な体験をさせていただいた。平易な日本語を選び、身振り手振りや英語を交えながらのコミュニケーションだった。私は、韓国の学生に韓国の生活習慣や食文化について、様々な質問を投げかけた。学生は時折、辞書を引きながらも、一つ

一つの質問に丁寧に答えてくれた。また、こちらの言葉にも熱心に耳を傾けてくれ、大変親しみを覚えた。韓国の学生とは、言葉が上手く通じないこともあったが、本当に良い関係を築くことが出来た。

事前研修の際、先生方に「21 世紀の朝鮮通信使になって下さい。」という言葉をいただいた。確かに日本と韓国は通信使を往来させるような友好関係にあった時代もある。しかし、日本が朝鮮に対して、残虐な行為を働いた歴史があるのも事実である。朝鮮侵略に始まり、創始改名や日本語の使用を強制した。現在でも、教科書問題や青島問題など日韓の間には歴史的な課題が残されている。このような背景から、私は「日本人は韓国人に嫌われているのではないか。」という思いが多少なりとも胸の内にあった。しかし、カトリック大学の学生や先生方は本当に手厚くもてなしてくれ、私の不安を吹き消してくれた。友好とは、両国の首脳が友好条約を結んだからといって成立するものではない。今回の研修のような、無数の小さな活動によって、目に映らぬ速度であっても、少しずつ築いていくものだと感じた。

当初の目標を振り返り、通信使になれたかどうか自問自答してみる。おそらく本物の通信使に接した日本人は、並々ならぬ努力をしたであろう。私のように、ろくに韓国語も話せない者は一人としていなかったと思う。今回の研修はカトリック大学の皆様に甘えていたと。手厚い歓迎や流暢な日本語に頼りきっていた。今度彼らに会う時のために韓国語の学習を始めようと強く思った。言語とは本来、経済性や将来性のために習得するものではなかった。心を通わせたいと願う相手がいて、その人のためにその人の言葉を学習するのだ。このような気持ちで始める学習はおそらく捗るだろう。

今回の研修では目に映る文化から目には見えない感動まで多くのことを体験し学ばせていただいた。このような貴重な体験に恵まれたことや、研修のために力を尽くしていただいた先生方、スタッフの皆様には、いくら感謝しても、しきれない。この恩は、来年の研修でお返ししたいと思う。今回の研修のようなすばらしい活動はこれからも続いていくだろう。これらの活動の礎を築いていけるよう一層努力していきたい。

相手を理解しようとすること

信州大学人文学部２年
折笠かすみ（日本語教育学専攻）

「相手を理解しようとすること」と「自分のことを理解してもらうこと」。他人とコミュニケーションをとる上で、どちらがより大切だと思うか。

これは、2004 年 10 月 25 日から 31 日にかけて行われた「第４回韓国言語文化研修」で企画していただいたプログラムのひとつで、私たちが韓国に到着した翌日、10 月 26 日に参加させていただいた日本語授業における玉懸先生の言葉だ。今、韓国言語文化研修を振り返ってみて、まず思い浮かぶのがこの言葉である。

案内していただいてたどり着いた教室は、日本の中学や高校の教室とちょうど同じくらいの大きさで、黒板も前に置いてある教台もほとんど日本のそれと変わりなかった。その教室内で私たちは、韓国人学生と日本人学生がちょうど二人ずつになるように机を四つ向かい合わせるように並べ、お互いに向かい合って座った。そして、はじめての授業参加ということで緊張し、気を張り詰めていた私たちに、玉懸先生はその言葉を投げかけて下さったのだ。先生の質問に対する答えについて、「相手を理解しようとすること」ではないかと一応自分の中で結論を出し、先生の答えを待つと、やはりより大切なことは「相手を理解しようとすること」であるということだった。韓国言語文化研修を通して私の中でとても大きな存在となったその言葉はしかし、その時には、答えを得たことに満足してしまい、深く考えることもなく終わってしまった。今思えば、きっとその時私は「相手を理解しようとすること」について「分かったつもり」になっていたのではないかと思う。けれども、やはり「つもり」は「つもり」でしかなく、私は「相手を理解しようとすること」について本当には理解できていなかったのだ。

玉懸先生や同じく日本語客員教授の斉藤先生の授業では、先生方から課題をいただきその課題を韓国人学生と解いていくこととなった。いきなり面と向かって外国語である日本語で日本人に話しかけるのは大変なことであろうに、日本語専攻の韓国人学生は、会う人会う人みな、素敵な笑顔で習った日本語を使って一所懸命話をしてくれた。授業は、私たちが日常で何気なく使っている「言葉」なのに、それを伝えることがいかに難しいかを実感するものだった。簡潔で分かりやすい「言葉」を志しても、どうしても接続詞が多くなってしまう自分の言葉がもどかしかった。自分でそう感じていたのだから、聞いていた韓国人学生はさぞ分かりにくかったことだろう。分かりにくい言葉や表現を使うと、相手の顔に疑問と困惑、とまどいの表情が浮かぶので、自分の言葉のいたらなさがよく分かった。

このとき私は言葉が伝わらないのはただ私の言い方が悪いのだろうとしか考えていなかったように思う。しかし、そうした授業参加のときだけではなく、夜、研修院に泊まりに来てくれた学生などと話をしているうちに、言葉が伝わりにくいわけが他にもあるのではないかと感じるようになっていった。それはほんのすこしの違和感だったのではないかと思う。けれども、それは日に日にカトリック大学の学生と話をするたびに大きくなり、ホームステイのパートナーと話をするときには最大限になっていた。私と同期の深見さんの共通のパートナーはオム・ミソンさんだった。きれいで明るい彼女はとても日本語が上手で深見さんと共にたくさんのことについて話をした。お互いのことや韓国・日本の俳優のこと、ほんの些細な日常のことまで。そのとき私は、初めて「彼女の知っている言葉と知らない言葉はなんだろう」と考えた。そしてそのことで、それまでは多くの韓国人学生と話している時「これくらいの単語は知っているだろう」などと自分で勝手に考えて話をしていたのだと初めて気づいた。それこそがずっと感じていた違和感だったのだ。もちろん簡潔で分かりやすい「言葉」で話すのは基本で、それができていなかったことはとても大きいと思う。けれどそれ以前に、自分で勝手に相手のことを決め付けて、勝手に使う言葉の範囲を決めていたのだから、伝わらなくて当たり前だ。そしてこのことに気づいたとき、突然、授業参加での玉懸先生の言葉が浮かんだのだった。先生の言葉がストンと胸に落ちた。

韓国言語文化研修で私はたくさんのすばらしい体験と時間を得ることができた。そしてそのなかでの最大の成果が上に記した「相手を理解しようとすること」についての体験だ。気づいた瞬間は本当に「目から鱗」だった。きっとあの瞬間の気持ちはこの先ずっと忘れられないだろう。このことは人とのコミュニケーションのほんの基礎で、当たり前のことかもしれない。しかし、今回の研修で実際に体験できなければ、私はまだまだそれをただ「分かったつもり」でいたに違いないのだ。私は今回の研修でとても大切なものを得たと確信している。

日本語で学ぶ
ー日韓文化交流から得たものー

信州大学人文学部２年
紀　偉（日本語教育学専攻）

それまで、韓国についてあまり関心がなかった私が、今は、韓国語をマスターしたい、韓国で生活してみたい、韓国人と友達になりたいと思うぐらい韓国が大好きになった。そう言ってしまうと、きっと「あなたもヨン様ファンなの」と思われるだろう。決してそうではない。韓国に興味を持つようになったのは、今回の「第四回韓国言語文化研修」に参加させていただいたおかげであった。

出発する日が近づくにつれて、「ワクワク」、「ドキドキ」の気持ちがますます強くなった。むしろ、「ドキドキ」のほうが強かった。「日本に留学している中国人として韓国の大学に行くなんて、皆はどう接してくれるだろう」と不安だった。「韓国語が分からなくてもいいから、日本語で話しなさい。」と言われても、私の中途半端な日本語が韓国の学生たちに悪影響を与えたらどうしようというプレッシャーもあった。

初めての海外ではないが、私にとって、初めての名古屋空港と韓国の飛行機が楽しみだった。この一週間の旅で、中国人留学生として、常に中、日、韓三国を比較していた。スチュワーデスさんは私の比較対象の一つだった。とても美しく、凛としていた。日本人女性と中国人女性の特質を結合したような気がした。後で日本人学生から「韓国のスチュワーデスさんはきれいだけど、冷たかった。」と聞いて、「中国の飛行機に乗ってみたら、もっとびっくりかもしれないよ」とくすくす笑いながら思った。それは決して人柄の問題でも、サービスの問題でもなく、ただ文化の違いだけだと改めて納得した。

飛行機から降り、バスに乗り、高速道路を走っていた。窓から周りの風景を眺めたら、中国にも、日本にも似ているような気がした。市内に入ってくると、道を歩いていた市民の姿や、店屋の雰囲気、そして車の運転の荒っぽさを見て、まるで中国に帰ってきた感じがした。だから、初めての韓国にはすぐに馴染んだ。

この一週間、とてもハードなスケジュールだったが、本当に充実した貴重な日々だった。その中で、一番印象に残ったのは、斉藤先生の日本語の授業を参観したことだった。見学者として後ろに座っていたが、授業が始まったとたんに、日本語学校時代に戻ったような気がした。完全に一人の学習者の気分になって、興味津津だった。昔受けた日本語の授業を思い出し、先生たちに対する感謝の気持ちが再び湧き出た。斉藤先生のように、外国人に日本

語を教える先生方は、学習者に日本語学力を自然に身につけさせるように、一点一点に、どのぐらい工夫をしていただろう。一つの言葉遣いに、どれだけ気を使っていただろう。決して、日本語が話せるだけで、日本語を教えられるという簡単なものではない。日本語教育学こそ、外国人学習者のニーズに応じて日本語を教える先生を育てる所なのである。斉藤先生は私たちの先輩で、沖先生の下で学んでいたということである。斉藤先生の生き生きとした授業を聞いて、自分の夢は一層明確になった。「すてきな日本語の先生になるためにもっと頑張ろう」と決意した。

ホームステイのパートナーは一人暮らしをしているソンアさんだった。彼女は何回か日本を旅行したことがあって、日本語がとても上手だった。彼女と違う言語を持っているが、同じ日本語学習者で、日本に居た経験があることで、話が弾み、すぐ仲良くなった。韓国人の率直性は中国人と似ていて、日本人のあいまいさに疲れるようなことがなく、とても気軽に付き合うことができた。私が日本人ではないにもかかわらず、ソンアさんは心を込めて招待してくれた。「紀偉さんのためにソンアさんは一日かけて、部屋を片付けたよ。」とソンアさんの友達が言った。確かに、ちょっと小さかったが、とてもきれいで、かわいらしい部屋だった。壁に日本のタレントや映画のポスターと日本を旅行した時撮った写真を、あちこち飾っていた。本棚に、日本語能力試験の問題集、日本の小説や芸能雑誌などぎっしりと並べてあった。日本に対する強い興味、日本語を勉強する熱心さは、そこから一目瞭然。そのとき、「ソンアさんに負けないぞ！」と心で叫んだ。

沖先生がおっしゃったように、日本語を学ぶことだけではなく、日本語で学ぶこと。日本では、日本語を学んで、日本語を使って生活して、日本の文化を身につけてきた。今回の韓国文化研修では、今まで学んできた日本語を用いて、韓国人と交流することによって、韓国の文化を学ぶことができた。同じアジアでも、国と国の歴史や、習慣によって、人々の価値観が大いに違っている。しかし、異国に行って、自分の目で見て、自分の心で感受することによって、価値観がきっと変わるだろうと思う。

最後に、この勉強のチャンスをくださった沖先生及びお世話になったカトリック大学の先生方と学生たちに感謝を申し上げます。「ありがとうございました。」

私の日本語体験記
ー外国語としての日本語ー

信州大学人文学部２年
深見倫恵（日本語教育学専攻）

10 月 31 日、一週間の韓国言語文化研修を終えて、日本へ帰ってきた。韓国で得た貴重な体験や、韓国で出会ったたくさんの人々との思い出でパンパンに膨らんだスーツケースと、おいしくておいしくてどれだけでも食べられそうな韓国料理でパンパンに膨らんだ自分の体を抱えて帰ってきた。帰り道、韓国での日々を思い出していた。その時ふと思ったのである、この一週間で日本語以外の言葉で話した時間はどのくらいあったのかと。

10 月 25 日、期待と不安で胸いっぱいの私を乗せた飛行機が韓国へ飛び立った。そんなに飛行機に乗ったことがなかったので、たった 2 時間の空の旅も私にとっては大冒険だった。韓国語で書かれた雑誌や韓国語で話される案内を聞くと、あぁ日本でない違う国へ行くのだなと実感した。

私の韓国への旅は今回が二度目だ。しかし今回ほど韓国人と触れ合う機会はなかった。今回の研修のなかで私の一番の楽しみであり目標としていたことのひとつは、できるだけ多くの人と触れ合うこと、コミュニケーションすることである。今回の研修ではたくさんその機会をもつことが出来た。私たちが一週間生活を共にした大学の先生方、そして学生のみなさんは、日本語を話すことが出来、私たちは日本語によって会話をし、自分の気持ちを伝えた。だから日本語しか話していないといってよいほど、コミュニケーションの手段として使っていたのは日本語だ。私はこのような生活の中で、母語話者同士ではなく、外国語として日本語を学んだ人と話すという体験をした。しかも、日本という土地ではなく、韓国で。それまでは日本ではない違う国へ行くという思いが強かったが、日本語ばかりの生活で、韓国にいるにもかかわらず、日本にいるような感覚になった。それはとても不思議な気分であった。

韓国にいながらコミュニケーションの手段が日本語であるというこの体験は、私にとって「日本語」を考えるきっかけとなった。日本語母語話者にとって日本語で話すということはとても自然なことであり、なぜこの言い方をするのか、なぜこの語順なのかを疑問に思うことなく話をしているように思う。しかし、外国語として日本語を学び、日本語を話す人たちにとっては、私たち母語話者が何の疑問も持つことなく使っている文法や語彙や言い回しが、いったいどういう意味なのか、なぜそうなるのかという疑問につながる。そのことを一番に感じたのは、

日本語教師の先生方の授業に参加させていただいた時だ。その日の授業は、日本人学生と日本語を勉強している韓国人学生がひとつのグループになって、あるテーマについて話し合うというものだった。その中で私は、私が何気なく話す言葉に対して「今の言葉はどういう意味？」とよく聞かれたのだ。私自身は相手が分かりやすいようにとできるだけ簡単な言葉で話しているつもりだが、よく聞かれた。しかも、そこで私がどういう意味なのか答えられれば良いのだが、どう説明したらよいのか分からず、詰まってしまうことが多かった。普段気にもとめず使用している言葉の意味をいざ聞かれると説明できなかったのである。

日本語を母語としている私たち日本人は世界中の誰よりも日本語を使って生活しているのだから、日本語のことなんて聞かれたらすぐに答えられるという考えなんてすぐに崩されてしまった。むしろ、日本語を外国語として学んでいる人々のほうが日本語について知っているのではと思うこともある。私たち日本人が使っている母語としての日本語の周りには、日本人の知らない日本語の世界があるように感じた。日本語の世界にいるのは私たち日本人なのだと思っているのは日本人である私だけで、その外にはもっと広い日本語の世界があるのに、それを知らず、日本人の母語としての日本語世界という殻に閉じこもっているだけのちっぽけな自分を感じた。もっと大きな日本語の世界に飛び出すためには、自分の国ではない他の国の言語や文化を学ぶように、内からだけでない、外から見た自分たち日本の言語や文化を学ぶ必要があると思う。自分の国の言語、文化としてだけ学ぶのでなく、世界の中のあるひとつの言語、文化として学ぶことだと思う。

以前、「大学で何を勉強しているの？」と聞かれた時「日本語を勉強しているよ」と答えると、「日本人なのに？」と言われた事があった。日本人が日本語を勉強するということはどういうことか、今回の韓国言語文化研修にはその意味を考えるヒントがあったような気がする。

今回このような機会を与えてくださったたくさんの方々に感謝しています。ありがとうございました。韓国の皆さんにまた会えるのを楽しみにしています。

韓国言語文化研修で学んだこと

信州大学人文学部２年
藤田亜希子（日本語教育学専攻）

飛行機で二時間。日本と韓国の距離である。こんなにも近い外国があるのか、と私は心底驚いた。飛行機に乗り込み、機内食を食べて、うとうと居眠りをしていたら着いてしまったのだ。夢か現実かはっきりしない寝ぼけ顔のまま空港に降り立ち、私はきょろきょろしながら歩いていたのだが、当然周りは日本人ばかりだし聞こえてくる話し声も慣れ親しんだ日本語である。実はまだ日本なんじゃないかという錯覚さえ抱き始めたその時、私の目には何やら見慣れない文字（というよりは記号に近いかもしれない）が飛び込んできた。ハングルだ。何かの看板だったようだが、もちろん書かれていることばの意味はわからない。そこでやっと私は目を覚まし、ここが韓国という外国であることをはっきり認識したのだ。入国審査の係員の人だって顔は日本人とよく似ているがれっきとした韓国人である。私は急に不安になり緊張し始めた。日本語なんて通じないし、私は韓国語がわからない。事前に韓国語を勉強してこなかったことを猛烈に悔やんでいた時、私の順番がまわってきた。私はうつむき加減で前へ進みパスポートを係員に差し出し、一応笑ってみたが、かなり力ない笑顔だっただろう。係員は手早く私のパスポートをチェックして判を押し、さっと私に返すと同時に手で先に進むようにと促した。その一連の作業はあまりに事務的で、私と係員が交わす会話などなかった。きっと入国審査とはこういうものなのだろうが、あんなに慌てふためいた私は何だったんだ、と一気に疲れ果ててしまった。

これが私の初めての海外経験でもある、韓国言語文化研修の始まりである。韓国に着いてから30分ほどしか経っていないのに疲労まで感じてしまい、この先7日間ももつのだろうかとちょっと途方に暮れていた。しかしそんな不安をあっさりと裏切り、この研修は私にとってたいへん充実した、実りの多いものとなった。何が良かった、どこが楽しかった、といちいち挙げていたらこの原稿には収まりきらないのでここでは省くが、この一週間の研修を通して私が一番心に残ったこと、深く考えたことがひとつある。それは、日本も韓国もそれぞれが独自の世界を持っている、ということだ。なんだそんなことか、そんなことわざわざ韓国まで行ってこなくてもわかっている、と思われるだろうが、どんなに韓国について知っていたとしても、日本でじっとしていては、少なくとも私はこのことに気付かなかっただろう。

韓国では食事のときお椀は置いたまま食べる。年上の人にお酒を飲むところを

見せてはいけない。地下鉄の車両の中で物を売る人がいる。他にも韓国独特の習慣やマナーがあり、私は毎日驚きの連続だったのだが、ある時私は「なぜ驚いたのか」と立ち止まって考えてみた。いろんな考えが頭をよぎったが、結局は、常に日本と比べているからだと思う。何をしても、何を見ても日本ではこうなのに、と両者を並べてしまうのだ。特に日本と韓国はことばがよく似ており、人も見分けがつかないことが多い。余談ではあるが、私はよく韓国人に間違えられた。似ている部分が多いからこそ、異なることがあれば余計に驚いてしまう。しかし歴史も文化も考え方も、似てはいても、やはり違うものは違う。そもそも並べて比べるものではない。それぞれが一つの独特の世界なのであり、もともと同じフィールドにはないのだ、と考えるようになった。韓国の学生と話していた時にこんなことがあった。私が日本から持って来たキャラクターのシールを見て、「あ、日本のステッカー？」とその韓国の学生は私に言った。細かいことを言えば日本で言う“ステッカー”よりはるかに英語の“sticker”の発音に近かった。それぞれ違う独自の世界である、ということは他国との対外関係もいろいろなものやことの受け入れ方もそれぞれ違うということだ。アメリカから来た同じ物のことを、日本ではシールと呼び韓国ではステッカーと呼ぶ。その時私は、こんなにも近く似ている国であっても、間違いなくここは外国で、日本とは違う「韓国」という世界があることを知った。そしてその異国で出会う驚きは、感動に変わった。

あれからもう１ヶ月たつが、私は日本に帰ってから気付いたことが一つある。それは韓国が日本とは違う一つの世界であるということは、日本もたった一つの独自の文化を持った国である、ということだ。韓国へ行き、初めて客観的に自分の国、文化を見つめることができた。外へ目を向けつつも、日本というこの国に生まれたこと、ここで学んだこと、ここの文化を誇りに思い、これからの国際社会を生きていこうと思う。

ありがとうございました。韓国の皆さんにまた会えるのを楽しみにしています。

落ち葉のように
ー日韓言語文化交流にてー

信州大学人文学部２年
李　燕（日本語教育学専攻）

木の葉の色が赤く染まり、一枚一枚と落ちていく秋の季節、植物のほとんどが冬を過ごす準備をしているように、落葉樹のほとんどは葉を落し、冬の寒さに耐える準備をしていた。今までは落ちてきた葉っぱは何の役にも立たないただのゴミだと思っていたが、実はたいへん大事な役割をしていることに気づくことになったのである。落ちてきた葉っぱが一枚一枚重なりあって地面を覆っていくのは、地面が冬の寒さで凍らないように、来年の春になって新しい木の葉が芽生えるようにするための布団のようなものであった。それを気づかせてくれたのは、今回の研修旅行であった。

十月の終わりごろ、私は韓国に行くことができた。初めての韓国、不安と好奇心で胸がいっぱいだった。カトリック大学の学生は私たちの事を歓迎してくれるのだろうか、みんなとの交流がうまくいくのだろうか、友達ができるのだろうか等、様々な不安とともに韓国に向かう飛行機に乗った。ところが、向こうの空港に着いたら、韓国の学生たちがいっぱいの笑顔を見せながら私たちを迎えてくれたのだ。なんだかほっと一安心した。しかも、みんな日本語が上手でコミュニケーションを取るのはそれほど難しいことではないと感じた。大学に向かうバスの中で見た町の光景は日本とそんなに変わらなかった。しかも、中国にも似ている所がたくさんあった。そのせいか、韓国に対する違和感はなかった。私が韓国に来る前に抱いていた不安もいつの間にか無くなっていた。

大学に着き、その晩、カトリック大学日本語日本文化の大勢の学生たちとはじめての顔合わせをした。同じぐらいの年齢のせいか、私たちはすぐに韓国の学生たちに溶け込む事ができた。お互いに今自分の国で若者の間で流行になっている事を紹介しながら、話は盛り上がったのである。しかも、韓国の学生たちは私たちがあんまり寂しくないように、一緒に寝泊りをしながら、夜遅くまでその話は続いた。そのような一週間だった。

一週間の中で、最も印象に残った事といえば民俗村の観光と、日本語スピーチ大会である。韓国の昔からの人々の生活ぶりが凝縮されている民俗村では、韓国の学生がガイドになって、私たちに韓国の歴史を案内してくれた。オンドルとはどういうふうにできているか、韓国の昔からのお祭りや、いろいろな風習について日本語で一生懸命に説明してくれた。最初はちょっとお互いに話すのが困難だ

ったが、民俗村を回っていくうちに自然に話も弾み、手を組んで歩くようになった。韓国の昔の人々の生活を知ったのと同時に私たちは韓国の学生との間に短い時間でも友情というものができたと感じた。民俗村での交流はたいへん良い経験になったと私は思うのである。

また、韓国の学生たちの日本語によるスピーチ大会は、私たちにある意味でカルチャーショックを与えた。韓国の学生たちが今一番関心を持っている事は就職問題と受験戦争の問題であった。このようなたいへん現実的な内容を用いてのスピーチは日本では余り聞いたことはなかった。また、昔から存在している政治的かつ歴史的な問題から、日本が好きで日本語を勉強したのではなく嫌いだからこそ日本語を勉強し始めたという学生も実際に存在していることを改めて知ることができた。私も一人の日本語を学習する外国人として、最初に日本という国が好きだから習ったのではなく、ただ試験の時に日本語だと良い点数が取りやすいという理由からだった。日本に対しての良い印象は日本に来る前までは全くなかった。しかし、このようなことをストレートに、しかも日本語でみんなの前で言うことは私にはできなかった。韓国の学生は、自分の気持ちを、感情を、ストレートに日本人にぶつけたのである。とても勇気があることだと私は思っている。しかも、彼らはまだ日本語を勉強して2年ぐらいしか経っていないのに大勢の前でスピーチをしている。その姿は自分がたいへん気弱な人間であることに気づかせてくれた。すばらしい体験であったと同時に私にとって興味深い経験になったと今でも思っている。

一週間という時間はあっという間だったが、私たちは向こうの学生たちと一緒に食事をし、一緒に交流をし、最後にはメールの交換をしながら別れを惜しんだ。

研修は終わったが、その後、交換したメールアドレスを利用してメールしたりしながら、今でもその交流は熱を保っている。撮った写真をインターネットに載せて、送ったりしながら、交流は続いているのである。研修期間はまるで落ち葉のように短いが、それですぐに冷めていくのではなく、今後の交流に向けての準備にむかって、私たちの気持ちという地面を覆って暖めていてくれる。しかも、その温度はまた次の研修までずっと保たれていく事を感じている。